

日本臨床歯科学会大阪支部 2022年度 第4回例会

第224回 日本臨床歯科学会 大阪支部例会

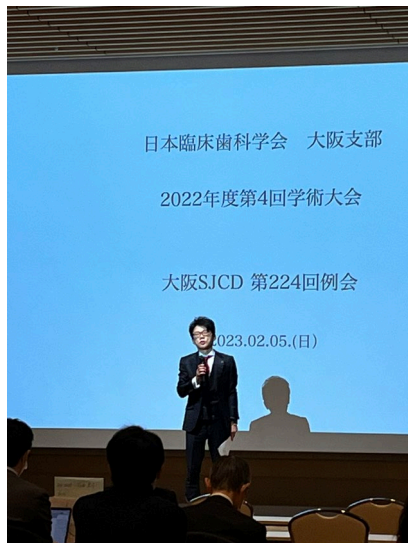
2023年2月5日(日)

オービック御堂筋ビル2F

2023年2月5日(日)オービック御堂筋ビルにて、日本臨床歯科学会大阪支部 2022年度
第4回例会第224回 日本臨床歯科学会 大阪支部例会が開催された。

開催に際し、新型コロナウイルス感染防止対策を十分に行なった上で現地にて開催さ
れた。

松永理事による司会進行のもと米澤大地支部長から今例会にて任期満了による退任の
挨拶が行われた。



今回は午前の部は会員発表2名、午後の部は理事のインサービス3名の先生方により行われた。

1人目の会員発表者は中藤 信也先生で山脇理事による座長のもと、『ライフステージを考慮した咬合再構成症例』という演題で発表された。欠損封鎖を目的とした矯正治療を含めた咬合再構成を行なった症例で、可及的にインプラント治療の介入をさげ、前歯部欠損へインプラント治療を行い審美的・機能的安定を得る治療がなされた。質疑応答では「抜歯部位が適切であったのか?」「前歯インプラント埋入において歯肉の厚みを考慮し結合組織移植を行なった方がよかったのではないか?」など活発なディスカッションが行われた。



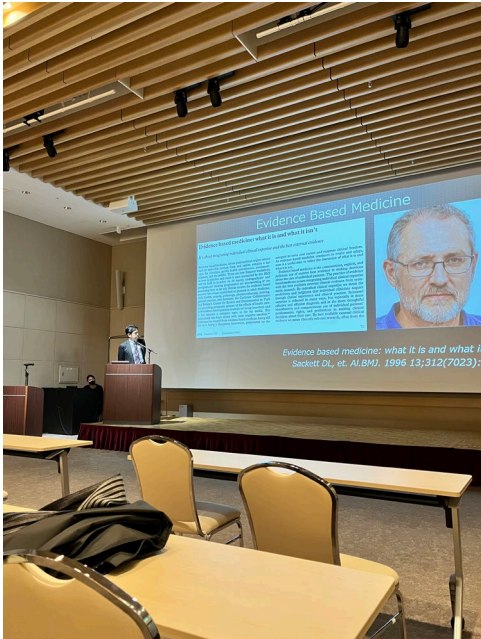
続いて、大塚歯科第3ビル診療所の大塚 淳平先生が登壇。座長谷尾理事、演題は『口腔機能異常を有するアングルⅡ級の高齢患者に対してインプラントを用いて行なった咬合再構成』であった。全顎的に不適合補綴装置を多数認め、部分的な治療の繰り返しによる下顎の偏位と臼歯部欠損の放置によるバーティカルストップの喪失が考えられ、プロビジョナルレストレーションを用いて顎位の是正を行いバーティカルストップの確立とアンテリアガイダンスが付与できる歯冠形態の補綴装置をインプラントを用いて確立し良好な結果が得られた。質疑応答では「咬合再構成の場合前歯の位置を決定し臼歯のポジションが決まるので、前歯の歯肉ラインの外科処置が臼歯インプラント埋入の後に行われていたため、治療順序が正しかったのか？」「咬合高径の挙上

が行われているがそれが正しかったのか？」 「マテリアル選択について」などのディスカッションが行われた。



午後の部理事によるインサービス

黒住 琢磨先生登壇。座長勝部理事進行のもと『臨床と研究～日本臨床歯科学会大阪支部の学会化にむけての取り組み～』という演題にて講演。SJCDは臨床歯科学会として学会化していくことで、日本学術会議から正式に学会認定を受けることが課題となりそのために定期的な学会の開催及び原著論文の作成が必須である。現在東京支部を中心に行われている研究報告および原著論文の作成現場の報告、今後大阪支部としてどのように研究組織を立ち上げていくのかの提案、各会員が日々の臨床で得られた知見をどのように研究につなげていくかについて講演をいただいた。



続いて本多 浩二先生登壇。『咬頭嵌合位の安定を考慮した補綴治療』という演題にて講演。補綴装置は人工物であるためいつかは再治療を行う日が訪れる。その補綴治療の精度を高めることは必須でありまた、歯科技工士との連携が重要となる。また歯科医師の技術だけでなく、歯科技工士の技術及び両者の知識の共有も必須である。今回症例を通してクロスマウントテクニックを用いて咬頭嵌合位の安定を考慮した補綴装置をどのように歯科技工士と連携して作製しているかを講演していただいた。



続いて田中 一茂先生登壇。『補綴治療術後管理～Longevityのために～』という演題にて講演。

治療終了後の「リコールチェック」というものは良好なLongevityのために必要な項目の1つである。①臼歯部インプラントと天然歯混在症例 13年経過 ②前歯部ブリッジ、臼歯部インプラント、失活歯の多い複雑な症例 8年経過 ③矯正後臼歯部インプラント症例 4年経過 ④上顎義歯、下顎インプラント、天然歯の混在症例 3年経過 の4症例を通して術後管理・リコール時のチェック項目について講演いただいた。



5名の先生方による大変貴重なご講演により大変勉強となった。

最後に大森有樹副支部長の挨拶をもって閉幕となった。



報告者: 広報 前沢 宙 担当理事 安賀 稔